

## 巻頭言

成人・老年看護学 教授 神谷 千鶴

学生の頃「看護研究」というものを初めて知り、文献を探したり、未知の部分を検証したりすることで、自分が今まで知らなかった事象を知るとはとても興味深く楽しいことでした。しかし、看護研究を深めていくにあたっては、他の学問分野の知識も必要となり、指導教授の勧めで、他の学部の研究室に指導を仰ぎに通い、全く講義を受けたことのない分野の研究手法を学んだ記憶があります。

本学は看護の単科大学であり、なかなか他の学問分野の研究に触れることがなく過ぎがちですが、大学・大学院時代の友人と年に数回会う中で、いろいろな分野との共同研究を行っていることを知りました。医療の専門職だけでなく、心理学や社会学、人文科学分野などとの共同研究があり、多くの成果をあげているということでした。科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金／科学研究費補助金）でも、人文学、社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」（研究者の自由な発想に基づく研究）を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」の助成も始まっており、今後は、様々な分野を取り込んだ研究が増えていくものと考えられます。

とくに私たちの学問である「看護学」は「人間」を対象としている学問であるため、対象に対する理解、看護介入においては他学問分野の知識を融合させていくことが必要になってくると考えています。先日、国際認知科学学会（12th International Conference on Cognitive Science ; ICCS 2019）に参加してきましたが、人間の認知にかかわる脳科学に関する研究発表が多く、人間の認知および行動に対して、脳血流量や脳波による解析が進んできていることを実感しました。日本の看護界においては、高齢化に伴う認知症患者の増加が大きな問題になっていますが、科学による解明が進み、効果的な介入方法が明らかになる日も近いのではないかと感じました。また、慢性疾患などの健康管理においては、認知行動療法を応用した看護介入が開発されてきましたが、これらについても脳科学による客観的な評価を行うことができるようになり、よりエビデンスの高い介入方法が確立されていくのではないかと感じられました。

看護は人を対象とする学問であるからこそ、他分野の知識と融合することでより良い看護介入の成果が得られると考えております。看護研究においても、人を理解するために必要な周辺学問を取り入れながら科学的に発展していくことを期待しています。